
緋弾のエリア ~ 薬物科の武偵 ~

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜薬物科の武偵〜

【Nコード】

N4352Z

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

東京武偵高校に新たに増設された学科<薬物科^{メデイシン}>。

元々、国家試験である薬物取扱者資格を取得できる<東京薬物専門高校>という高校があった。

だが、少子化による生徒減少により経営が困難となり、国立である武偵高と統合することとなった。

薬専高に通っていた<姫神^{ひめがみ} 薫^{かおる}>(17)もまた例外ではない。

薫の所得済みの資格は危険物取扱全種、薬剤師、有機溶剤作業主任者、麻薬取扱者、毒物劇物取扱責任者等を所有している。

というか、学校が強制で取らせるのだが……。
そんな普通の高校生生活からかなりかけ離れた薫は、これからもっと普通の高校生からかけ離れるとは、夢にも思っていなかった……。

<作者メッセージ>

こんにちは、私は国語力・文章力などの小説に必要な要素が欠けています。

ですが、私は自分のできる限りの力を出し切って書きたいと思うので、目を瞑ってください。

1 弾 Prologue

とある日、俺は引越し屋のトラックに揺られながら、眠っていた。

今年から俺は東京武偵高校に新設された学科……<薬物科メデイシン>に所属することになった。

そうなった理由は、少子化により 全校生徒数が800人から一気に290人に減ったからだ。

それもそのはず、今年入る予定の一年生は、18人で、今年卒業したのは、500人、在校生はたった290……。

それに新入生を足しても、308人……。

少なすぎる……。

それに、今在校している生徒には海外の研究機関に行く者もいる。

その為、大体在校生は200人居るかいないか……。

3年は120人、2年は俺を含め、62人、1年は18人となった。

その為、経済的な余裕がなくなって、廃校となった……。

だが、武偵局の計らいで、武偵高と統合するとなった……。

さすが、校長の人脈……。

その人脈を生徒集めには役立てんのかね……。

俺はそう考えていた。

すると、トラックは停まった。

「着いたぞ、ガキ」

「見りゃわかるって……」

俺はそう呟いて、トラックから降りた。

しかし……、薬専校の寮よりきれいだな……。

「おら！さっさと運べよ！」

ちまちまうるせい奴だな……。

「分かってるって……」

俺は渋々、荷物を運ぶ。

運ぶと言っても、アタッシュケース×8と実験用具セット、白衣と私服だ。

そんなに数は無いが、アタッシュケースは一つ10kgある。

俺はそんなアタッシュケースを4つ同時に持って、今日から住まう部屋に運んだ。

部屋は遠山っていう人の隣だ。

すべての荷物を運び終え、運送業の男性を見送りに、外に出た。

「んじゃあ、達者で暮らせよ」

「言われなくても分かってますって・・・」

「しかしまあ・・・、なんでお前は行かなかったんだ？」

「何にだよ？」

「寮だよ、寮。折角、校長が学校の土地を売り払って、買ってくれたんだからよ。ちったあ校長の恩も着ろよな」

「んなこといったら、校長に迷惑掛けっ放しになんだろ・・・」

「そうだな・・・」

「また何かあったら連絡するよ」

俺がそういうと、男性は「おう」と言って去って行った。

さてと、俺も部屋の片づけするかな・・・。

俺はそう考え、部屋に戻った。

部屋に戻り、俺はアタッシユケースをクローゼットに入れた。

そして、ある程度、部屋を片付けたあと、チャイムが鳴った。

俺は時計を見た。

時刻はPM1:29を回っていた。

確か武偵高説明会はPM2:30からであったよつな気がする。

てことは、恐らく……

俺はそう考えつつ、玄関を開けた。

そこには、セーラー姿の少女が居た。

「よう、春風。何の用だ？」

「おっつゝ。今日は薫が来る日って聞いてたから、来てみたの。そしてついでに、いっしょに武偵高に行かない？」

「別にいいぞ。すぐ着替えるから待ってる」

俺はそう言い残し、リビングで着替えを済ませ、学ランを着る。

東京薬物専門学校は学ランである。

女子はセーラー服。

まあ、これを着るのは今日が最後だろう。

説明会の時に制服の採寸もするって言ってるしな……。

そして、俺は玄関に出て、春風と共に武偵高に向かった。

武偵高に到着し、体育館に入った。

すでにほとんどの生徒が集まっていた。

俺は自分の学年のところの椅子に座った。

周りの奴はみんな顔見知りだ。

といっても、当たり前なことなのだが……。

そして、説明が始まった。

この武偵高では、<薬物科^{メドサイン}>は、衛生学部になるらしい。

薬物高では、全員が薬剤師の資格を取得しているため、納得できるのだが、劇毒物を扱う奴は少し頭を捻るだろう。

まあ、俺はどうでもいいんだが……。

その後、制服の採寸をして、設備説明を受けた。

その途中・・・・・・・・迷った・・・・・・・・。

俺と春風、それに俺の親友である、倉木雪弥くろぎゆきや（17）、春風の親友である、姫川ひめがわ（ひめがわ）愛美あゆみ（17）・・・・・・・・。

「なんで迷ったんだ？薫」

「なんでだろうな・・・・・・・・、雪弥」

「そんなの決まってるじゃない・・・・・・・・」

「これはもちろん・・・・・・・・」

「「「雪弥が興味本位で廻り過ぎ！！」」」

俺と春風、愛美はハモった。

「全部俺のせいだよ！！！」

「「「それしかねえだろ！」」」

俺達がそういうと、雪弥はしょぼんとした。

「さてと、これからどうするの？薫」

「感でいくしかねえだろ・・・・・・・・」

俺は適当に、歩く。

すると、クロロベンゼンの香りがした。

恐らく、メデイシン薬物科の学科塔が近いのだろう。

俺はそう考え、香りを辿った……………。

1弾 Prologue (後書き)

ひめがみ かおる
姫神 薫 (17)

髪：漆黒のナチュラルスイングショート

眼色：ダークブルー

身長：172cm

所属：薬物科2年

はるかぜ しほ
春風 詩穂 (17)

髪：漆黒のロングヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：155cm B：B70

メティン
所属：薬物科

くろぎ せいか
倉木 雪弥 (17)

髪型：濃い茶色のマッシュウルフカット

眼色：ダークグリーン

身長：170cm

メティン
所属：薬物科

ひめかわ あゆみ
姫川 愛美 (17)

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：153cm B：A60

メティン
所属：薬物科

2弾 Second Prologue

香りを辿ると、「KEEP OUT」「HAZARD AREA」と書かれたテープで仕切られている建物に到着した。

その建物の付近には防護服を着た人が10名ほど居た。

入口のあたりに、有毒を記す絵が描かれたトラックが一台居た。

そのトラックの荷台から、防護服を着て、フォークリフトを運転している人が、何かを運び出した。

「ありやなんだ？」

「薬物科なら自分で考える」

俺は雪弥が聞いてきたため、そう返す。

目を凝らして、トラックに書かれた文字を見た。

そこには<トリクロルエチレン>と書かれていた。

「……さっさとここから離れるぞ」

俺は振り返り、その場を離れた

「お、おい！」

雪弥は慌ててついてきた。

もちろん、春風と愛美もついてくる。

「一体どうしたの？薫」

「お前も自分で考えろ」

「ケチくさいな、教えてよ」

俺は立ち止り、振り向く。

「仕方ねえな……。ありゃトリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

俺がそういうと、3人は驚いた表情をする。

「おいおい……。なんでそんなもんがあんだよ……。？」

「俺が知るか。恐らく、劇毒物取扱関係だろ。それより、早く合流しないと……」

俺は携帯を取り出す。

すると、3件ほど着信があった。

「風宮からだ」

「風宮から？なんでお前が風宮の携番知ってんだよ？」

「別にいいだろ。それより、電話してみないと……」

俺は風宮に電話をかける。

『おーやっとな繋がった。お前らどこに居んだよ?』

「悪い、恐らく薬物科塔から西に500mのところだと思っメデイシン」

『もう薬物科塔メデイシンに行ったのか!?』

「ああ。お前らも行っただろ?」

『それがよ、今は立ち入り禁止らしいんだ。なんか劇薬を納庫して
るらしくてな』

「それなら見たぞ」

『本当か!?!で、薬品はなんだ?』

「トリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

『おいおい……マジかよ……。お前らよくそんなところ行けた
な……。もし俺がお前らだったら
逃げ出すっての……。』

「俺達も逃げてきたところなんだよ。高濃度のトリクロルエチレン
つつつたら、毒分類だからな。それよりお前らどこいんだよ?そっ
ちと合流すつからよ」

『ああ、ここは確か……。強襲科実習場……。次は救護科
の学アンビュラス

科塔に行く予定だ』

「分かった。なら俺達は救護科アンビュラスの学科塔に直接向かう。案内人には伝えといてくれ」

『了解。んじゃあな』

そう言って、風宮は通話を切った。

「さてと・・・」

俺はポケットから地図を取り出し、開く。

今俺達が居るところから救護科アンビュラスの学科塔まではそれほど離れては居ない。

「んじゃあ行くか」

「じゃあ俺が先頭を・・・」

雪弥がそういうと、空気が重くなった。

「・・・やっぱ薫が先頭でしょ」

「そうだね」

「おい・・・なんで俺じゃダメなんだよ・・・?」

「デジャブを見たからよ」

春風がそついうと、愛美が相槌を打った。

「んなことどうでもいいからさっさとあいつらと合流するぞ」

俺はそう言っつて、歩き始めた。

数分後、俺達は救護科学科塔アンビュラスに到着した。

「まだあいつ等は来てないっか・・・」

「まああいつらが先に来れるって保証はねえし。それに、あいつらは強襲科アサルトの学科塔から

来るって言っつてたからもう少しかかるだろう」

「そんなに遠いのか？」

「約0.9kmだ。まあ気長に待とつや」

俺はそう言っつて、近くのベンチに腰掛け、上を見る。

木陰が涼しいな。

すると、隣に春風が座つた。

「薫、どうして寮に来なかつたの？」

「どっしどっしって・・・」

「そつだぞ。お前が居ねえから春風がさみ……」

雪弥が何か言おうとした瞬間、春風がボディーパーカーを食らわした。

「お、おい……」

「何でもないって、ねえ？ゆ・き・や！」

そつ言っている春風……怖エ……。

「あ……ああ……」

雪弥は苦しそつに腹を押さえて言う。

「そ、そつか。発言には気をつけろよ」

「そつする……」

「で、なんで校長の用意してくれたマンションに入らなかったの？」

「それは……、校長に迷惑をかけたくないからで……」

なんだか苦しい逃げ方だな……。

「ふ〜ん……。でも、薫のために一か所だけ部屋が空いてるんだけど……」

「ああ、あの部屋は後輩にでも使わせてやってくれ。俺はあそこに入る気は始めからないからな」

「わかった。でももし、来なくなったら、事前連絡してね。そんな時は部屋のあて、探すから」

「そんな時は頼むな」

そんな話をしていると、風宮達がやっと来た。

その後、いろいろな説明を聞いて、寮に戻った……。

寮に帰り、俺は学ランを脱いで、段ボールに畳んで直した。

「もう……使わないからな……」

俺はそう呟いて、私服に着替え、制服とズボンを洗濯機にかけ、寝室のベッドに倒れた。

武偵高の制服は明日には届くらしいしな……。

あと、銃刀所持が校則で決まっっていて、俺は無難にベレッタM8000という銃とW2鋼という素材を使ったバタフライナイフを頼んだ。

てか、薬物を扱ううえで、火気は厳禁だ。

だから、銃には恐らく弾は込めない。

でも、そしたら意味ないか……。

俺はそう思いつつ、眠りに就いた……。

3弾 Medicine

翌日……

早くも小包として制服と銃刀が届いた。

銃刀には、ホルスターという装備のための収納アイテムが付いてきた。

俺は試しに制服を着て、武装してみる。

我ながら、様になっている事に驚いた……

ってこんなことしている場合じゃねえ。

俺は急いでスーツに着替えて、部屋を出た。

寮の下にはタクシーが停まっていた。

俺はそのタクシーに乗り込む。

そして俺を乗せたタクシーは走り出した。

今日は、青森まで里帰りだ。

どうやら、俺のことを星伽神社に紹介したらしい。

まあ、父さんと母さんは星伽の専属薬剤師だから……

後継ぎの俺を紹介したいのも無理は無いつか……。

しばらくして、タクシーは成田空港に到着した。

料金を払い、手ぶらで空港に入り、チケットを買って、機内に向かった。

俺はそこまで金持ちでもないため、エコノミーに座った。

それも格安で訳ありの奴をな……。

俺はそう思いつつ、外を眺めた。

成田空港から青森空港までは約2時間弱掛かる。

だから、それまでは暇なのである。

そういえば、里帰りするのって今回が初めてだ。

初めてというか、去年、日本唯一の薬物専門の学校である東京薬物専門高校に入学するために上京してきた。

だがその学校も一年経って廃校になった……。

何のために俺は東京に来たんだか……。

ハア……、下手したら帰って来いって言われるんだろうな……

。。。

嗚呼・・・、なんだかそう考えたら帰りたくなってきた・・・。

しかし、もう乗っちゃった・・・。

あっち行ったら、恐らく迎えが来てるからエスケープ不可だろ。

あの二人・・・元気にしつつかない・・・

そして・・・青森空港に到着した。

手ぶらのため、荷物を取りに行くこともせず、出口を出た。

相変わらずつてところかな・・・。

俺はそう思いつつ、タクシー乗り場に向かった。

タクシー乗り場に着くと、がらくんとしていた。

「全然いねえし・・・。なんでだ・・・？しゃあねえ・・・、歩いて行ける所まで行くかな」

俺はそう呟いて、歩き出した。

まあ東京より少しだけ、自然が多いくらいだ。

俺はそう思いつつ、歩いていると、黒塗りのプリウス が目の前に
停まった。

「よっ、薫」

車の窓から顔を出して、言ってきた男性……。

俺の父さんである姫神 彰あきである。

奥にはにっこりと微笑む女性……

俺の母さんである姫神 郁いくである。

「なんで今なんだよ……」

「悪い悪い。ちょっと道が混んでてな」

「まあいいけど」

俺はそう言って、車に乗り込んだ。

「で、話は変わるけど、薬専高が廃校になったって本当？」

母さんは後ろを振り向いて俺に問いかけてくる。

「ああ。だけど、東京武偵高に新設された薬物科メデイシンに全員移動になっ
た。だから、今まで
通りだって」

「それならいいんだけど……」

「そういえば、星伽家の長女が東京武偵高に居るらしい。まあ縁あったら仲良くしてくれよ」

「はいはい、縁があったらね」

俺はそう答えて、外を眺めた。

しばらく走ること、約40分……。

俺の実家に到着した。

俺は車から降りる。

「まあたった一年ぶりなんだからあまり変わっちゃいない」

まあそうなんだろうが、格式ある家にしかない風情がある。

単に古いだけだが……。

俺は久しぶりに、自分の部屋に戻った。

俺の部屋は漢方薬草の本などがたくさんある。

小さい頃からこういうのを教えられてたからな……。

俺は小さい頃に使っていたベッドに座り、漢方の本を読む。

その本は専門的な表示が言葉も入っている。

今でも分からないこともな……。

俺はこれ以上みていると目が回る為、本を閉じた。

生成方法と調合は、母さんから習っている。

薬草の見分け方も小さい頃から父さんから習っている。

その為、薬を作ろうと思えば作れる。

すると、ガチャッとドアが開いた。

「薫、そろそろ星伽神社に行きましょうか」

「わかった」

俺は母さんにそう返事をして立ちあがり部屋を出た。

家を出て、徒歩で星伽神社に向かう。

星伽神社は由緒正しい家柄であり、その専属薬剤師をしている父さんと母さんはとても優秀なのだと感じる。

感じるんだが……、母さんに至っては天然要素を感じる。

その辺を突っ込んだら母さんは泣くであろう……。

というわけで黙っておく。

しばらく自然に囲まれた道を歩くと、神社が姿を現した。

これがく星伽神社である。

星伽家は代々、緋の巫女・・・通称く緋巫女への血を引いている家系である。

そして、俺の家系である姫神家は星伽と並行して代々、薬草を基に薬剤を作ってきた家系である。

詳しいことはくひめがみけでんだいろく姫神家伝代録に書いてあるのだが、どうして星伽と関係を築いたかは記されて居なかった。

まあそんなことを知ったからといって、俺が姫神家の後継ぎになることは絶対である。

一人っ子ってのもなんか不便だな。

だって後継ぎが一人しか居ないんだからな。

ま、今さら嘆いたって何も変わらない。

俺はそう思いつつ、父さんと母さんの後をついて行く。

そして、神社の近くにある家に入る。

中に入り、応接間的なところに連れられ、正座をして座った。

ここに初めて来たのは、8年前だ。

確かあの時は、母さんと父さんの付き添いで、薬を持って来た時だ。

俺がそんなことを考えていると、ふすまが開き、巫女姿の女性と少女が入って来た。

そして対面するように座った。

「さて、彼が彰の息子か？」

「はい。名を薫と言います」

俺は一礼をする。

そして、ある程度話を聞いて、俺は東京に帰った。

帰りついたのは、夕方4時半であった。

まあ、普通だろう。

あ、そういえば夕食を買ってなかったな……。

まあいいか……。

明日始業式だからな……。

それに、クラス編成の説明を聞きに行かないとな……。

そして翌日……

俺は朝8:00に武偵高制服に着替えて武装し、家を出て、武偵高に向かった。

学校に到着して、張り出されたクラス表を見る。

俺は2年A組……。

しかも……俺一人だけ……。

なんでだよ……。

「薰……一人なんだね。可愛いそうに……」

と背後から声がした……。

「春風、そういう方がぐさりと来るって……。それよりお前どのクラスだ？」

「私はC組だよ。雪弥と愛美も同じ」

「そうか。まあ俺はなれてっからいいんだけどな」

「まあお互いに頑張ろう。それじゃあね」

そう言って、春風は去って行った。

俺は教室に向かった。

時間帯的には、武偵高生徒がすでに登校している時間帯だ。

だから周りには元薬専高の奴らしか居ない。

そして教室の前に立つ。

すると横から小学生くらいの少女がやって来た。

放すこともないので無視しておく。

そして先生が少女の名であろう名と俺の名を呼んだ。

少女が入った後に、俺も続いた。

「彼女は強襲科アサルトの神崎・H・アリアちゃんです」

女教師がそういうと、一人の男子がずるりと椅子から滑り落ちた。

「遠山君、どうかしたの？」

女教師が滑り落ちた男子に問いかける。

「べ、別に……」

男子はそう答えた。

「それならいいんだけど……。そして、彼は今年から武偵高に新設された薬物科メデイシンの姫神 薫君です」

俺は一応、一礼した。

「それじゃあ席は……」

「先生、あたしあいつの隣がいい」

と神崎という少女がそう言った……。

すると、その男子の横に座っていた大男が立ちあがった。

「よ、よかったなキンジ。なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ……!」

大男は男子の手を握りながらぶんぶん振る。

「先生！俺転入生さんと席代わりますよ……!」

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねエ。それじゃあ変わってもらえるかしら?」

「ええもちろん!」

大男はそう言って、少女が俺が座るはずの席に座った。

少女はとことごと男子のところまで歩いて行く。

そして、立ち止った。

「キンジ、これさっきベルト。返すわ」

べ、ベルト!?

まさかそんな関係なのか!?

「理子分かっちゃった!これ フラグばっきばきに立ってるよ!」

と窓際の少女が言いだした。

やっぱりそうなのか!

「キーくん、ベルトしてない!そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた! これ謎でしょ

謎でしょ!??でも理子には推理できた!できちゃった! キーくんは彼女の前でベルトを取るような

何らかの行為をした!そして彼女の部屋にベルトを忘れて行

った!つまり二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なのだよ

以外に武偵って大胆なんだな……。

俺はそう思った。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!」?

「影が薄いヤツだと思ってたのにッ」

「女子どころか他人に興味がなさそうなくせに裏でそんな事を!？」

「フケツ!！」

すると少女は太もものホロスターから銃を取り出し、撃った。

ズキューンという銃声が鳴り響いた。

怖ッ!！」

俺は二・三步下がった……。

「れ……恋愛なんてくだらない!！全員覚えておきなさい!！そんなことを言うヤツには…風穴あけるわよ!！」

神崎は顔を赤くして、そう叫んだ。

「ごめんなさいね。こういうのは日常茶飯事だからあまり気にしないでね」

と先生はにっこりとほほ笑んだ。

「あはは……」

気にしないってところが無理だ!！」

「まあ薫君は、窓際のあの席でいい?」

「ええ。別にかまいません」

俺は空いている席に座った。

後ろにはさつき迷推理をした少女の前である。

そして、午前の授業が終わり、俺は教務科マスターズと呼ばれる教科塔に来ていた。

まあなんていうか・・・、薬物科の担当教諭に書類を提出しに来たのだ。

本当は昨日の昼に提出する書類であったのだが、俺は実家に帰っていたので提出できなかつたのである。

その為、今に至ったわけだ。

俺は教務科のドアをノックし開ける。

「メデイシン薬物科2年の姫神です」

俺がそういうと、真正面に居る白衣の下ぶち眼鏡の男性がキュウリを生噛りしながら手を振っている。

「こっちこっちィ〜」

と男性が言ったため、俺は男性に歩み寄った。

「これが書類です」

俺は書類を渡した。

「はいはい」

男性は書類を受け取って、眺める。

「はい、確かに受け取ったよ。あ、これは薬物科メデイシンの学科塔に入る為のカードキーね」

男性はそう言って、一枚のカードキーを渡してきた。

俺はそれを受け取る。

「そういえば自己紹介が遅れたね。僕は元薬物総合研究所教授の江川 浹。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願ひします」

俺はそう挨拶をして、教室に戻った。

そして、すべてが終わりに、俺は寮に戻った。

遠山という人は、男子の質問攻めからうまく逃げた。

俺はいくつか質問されたが、ほぼ遠山という人の方に行ったため、助かった。

だが、彼は不幸な人間だな……。

俺は寮の部屋に入り、ブレザーを脱いでソファに座って、テレビを点ける。

そして、横になり目を瞑る。

翌日・・・・・・・・

俺は知らないうちに寝てしまっていた……。

時計を見ると時刻は朝7:30を回っていた。

俺はゆっくりと準備をして、学校に向かった。

今日からは学科の授業が入ってくる。

やっと本来の授業ができるというものだ。

だが、トリクロールエチレンが搬入されているため、警戒はしておいたほうがいいだろうな……。

そして、午後の授業になり、俺達は薬物科の学科塔に白衣姿で入る。

俺は第二研究室で、インフルエンザを殲滅する薬品開発部門にまわされた。

第二研究所……

「先輩、このサンプルの結果は効果なしです」

そう一年の雨浪 隼しゅんが言った。

「そうか……。なら、そのサンプルは適正に処理してくれ」

「分かりました」

隼はそう返事をして、去って行った。

俺は電子顕微鏡で撮影されたPCのディスプレイを見ながら、インフルエンザウイルスの動きを観察する。

この研究室に居るのは俺と隼だけだ。

そもそも隼は、俺のパートナーだ。

薬物を扱うに当たり、パートナーは必須なのである。

いざ倒れたときかに助けが居なかったら困るからな。

だから、研究室に居る時は必ず2人で行動しなければならない。

「さてと、次はこの薬草を試してみるか……。隼、次のサンプ

ルを作るぞ」

「分かりました」

俺はインフルエンザウイルスを高濃度に抽出した液体をガラス皿に1滴垂らし、周りに薬草から抽出した液体を周りに流しこんだ。

「後は結果を待つだけだな……」

「そうですね」

「んじゃあ帰るか」

「え？もう帰るんですか？」

「ああ。根を詰めすぎたら事故につながるからな。無茶は禁物だ」

「そうですが……、他の研究室はまだ実験中ですよ」

「んなこと俺が知ったことか。他は他、うちはうちだ。それ以外の理由は無い」

俺はそう言っつて、白衣をロッカーにかけ、ブレザーを着る。

「……分かりました。また明日ですね」

「そうだ。まあ、明日は今日より倍以上のサンプルを用意するつもりだ。それで一気に済ませる。いいな？」

「はい、構いません」

「よし、じゃあ戸締りは俺がするから先に出ろ」

「分かりました」

隼はそう言って、即座に着替えて、帰って行った。

俺も戸締り、機械を確認して寮に帰った。

俺はこの時……、人生最大のバスジャックに遭遇するとは夢にも思わなかった……。

3弾 Medicine (後書き)

江川 浹えがわ きよう(20)

髪：銀髪のショートヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：167cm

所属：薬物科メデイシン教諭

雨浪 隼あめなみ しゅん(15)

髪色：藍色のショートヘア

眼色：ダークブルー

身長：153cm

所属：薬物科メデイシン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352z/>

緋弾のエリア～薬物科の武偵～

2011年12月21日23時49分発行